

近代小説理論の一傾向

—— 鷗外歴史小説の問題性を中心として ——

川 島 秀 一

一

現在、いくつかの作品が所謂「歴史小説」の名をもって呼ばれ、その名称は、近代小説の一種様式的微標語になった感がある。しかしそこでは、それら作品が「歴史小説」「歴史物」「史伝物」「時代物」等々の名で呼ばれ、ほとんど何の限定もなく、評者によってかなり恣意的に使い分けられているようにもみえる。

しかし、かかる評者の不注意にもかかわらず、ある作家には、「歴史」への関心なるものがその作家行為の中に、あたかもある種のスベルように抜き難い重さをとどめているのである。

今その一人中山義秀は、『中山義秀自選歴史小説集』の広告文に、彼自ら次のような一文を書きとどめている。

私は戦後気のむくままに歴史物を書いてきた。地図によって地点の位置と他との距離がわかる。歴史によって、人間の始終という行為の実体が報告されている。何物をか感得させうるものでなければ作品の価値はない。私はすくなくとも、その価値を目ざしてきたのである。

小説が「何物をか感得させるものでなければ、作品の価値はない」とは、いかにもさりげなく一見平凡ですらある。しかし、実はこのことのなかに戦後という時代、もつと正確には近代という時代と文芸のかかわりに対して、氏の確かな選択がなされていることに注意しなければならない。中山義秀の文芸世界についての考察は別の機会に譲るにしても、それらは、「人間の始終という行為の実体」と呼んだその人間の行為と情熱への深い信頼と愛情、それらに支えられたあの暖い透明さに満ちた氏の作品世界とも決して別のものではないであろう。

「感得させる」「何物をか」、その「何物」かとその時代と現実を生きる人間とのかかわりよう、いわば文芸の意味それ自体の再生なのだともいえよう。ここにおける「歴史」への関心、それはまた近代それ自体への深い懐疑の徴憑なのでもあろう。

今本論致は近代歴史小説の系譜をたどらんとするものではないし、そのこと自体は、具体的な作品の考察をまたねばならないことはいうまでもない。ただ近代歴史小説におけるよりラディカルな問題の性格が、作品そのものの価値認識に、あるいはまた「小説」という表現形式そのものの問題性にまで及ぶということはまちがいのないところであろう。この時、歴史小説に対するかなり恣意的な概念規定の曖昧さやその取り扱い、その困難な問題の性格をかえって見定め難くするように思われる。

註(1) 『中山義秀自選歴史小説集』 広告文、昭和三十二年五月、宝文館。

今これら問題の発端が、鷗外歴史小説に発することは周知のとおりである。かつて、その鷗外歴史小説については幾

多の興味深い問題性が指摘されつつも、またそこではその問題の困難性の故に、ある種の論理的混沌がもたらされてきたことも事実である。しかも問題の肝心は、「小説」という概念自体を含めた表現形式そのもののなかに顕現されてくる性格をもっている。特に鷗外の場合、この問題の性格は、所謂「歴史小説」と「史伝」との関係という、より困難な問題をかかえこむことになるのである。

その問題の性格への手がかりとして、たとえば石川淳が「澠江抽斎」について与えた有名な讃辭をあげることができる。それは、次の如くなのである。⁽¹⁾

「抽斎」「蘭軒」「震亨」はふつう史伝と見られている。さう見られるわけは單にこれらの作品を組み立ててゐる材料が過去の實在人物の事蹟に係るというだけのことであらう。いかにも史伝ではある、だが文章のうまい史伝なるが故に、人はこれに感動するのではないのである。作品の世界を自立させているところの一貫した努力が人を打つのである。

ここにみる限り、所謂「歴史小説論」において最初にもたらされる問題、つまり「歴史」ということばが、そして「小説」ということばがになう実体、あるいは表現行為におけるこれら二つのものの緊張関係、今これらを氏は見事なまでに止揚していられる。氏の関心は、なによりも先ず氏によって「努力」と呼ばれた、その表現行為を支えている無際限な憧憬と抱負をはらんだ作家精神の異様なまでの強靱さに向けられている。氏は続けて、その「努力」と「小説」との関係を次のように説明されている。⁽²⁾

さういう自分の努力と小説との不可分な関係を何げなく通り越して行つた点に於て鷗外小説觀の一端が窺はれるであらう。

つまり氏においては、この「努力」というものは、「小説」という表現形式一般にとつて自明のものなのだというのである。

石川淳のこの結論を考えてみる前に、できるだけ鷗外自身のことばを手がかりにしてみたい。たとえば「何げなく

通り越して行った」というその「何げなく」も、鷗外の、自己の史伝に対する不用意な態度を意味するものではないであろう。鷗外は、「小説」と自分の「史伝」の相違について明確に規定してみせる。明治二十五年（一八九二）二月、雑誌「柵草紙」第二十九号に掲載された「山房拊掌談」の中で、次のように述べている。⁽⁸⁾

美文は詩想と詩形とを兼ね取めたり、詩想と詩形とは並に是れ文學者を益するものなり。／まことの史傳はかく小説らしくなるべきものにあらず、何處までも真直に事実を傳ふべきものなり。

かかる態度は、後年に至るまで少なくとも鷗外自身の中では一貫したものであったと思われる。ここにみえる小説的「真実」と「事実」の混同、それはこの時期の鷗外がなによりも避けて通った肝心なのである。この鷗外に、この時期の幾多の小説論は、次のように把握されていた。

○竊に今の小説世界の有様を見るに奇を探り、巧を弄し、美術の神髓をば何時しか打ち忘れて岐路に迷ふもの滔々として皆是なり。（「掘り出し物を読んで」）

○真理の發揮、人生の説明、社会の批評、この三つを小説家の責任とす。／固より余の是認するところなり。蓋し人生の説明と社会の批評とは、小説の材に対する約束なり。其所謂真理の發揮に至りては、則是れ詩の神髓なり。作る所若理想の本質を現するに非ずば、豈小説ならむや。豈詩ならむや。（「今の諸家の小説論を讀みて」）

つまり、その「小説」と「史伝」という二つのものの明確な概念規定が向きあわされている現状とは、「小説の材」に対する感傷的な癒着、そこから起こる独善的な「一種の精神上的虚無主義」⁽⁴⁾、またその反対側にある「抽象的理想主義」⁽⁵⁾などである。この現実世界と「理想の本質」、現実とイデーとのかかわりよう、そしてそれにかかわった小説的形式へのゆるぎない関心である。

こう考えてくるとき、自己の「歴史小説」「史伝」に対する鷗外のかなり明確な態度を承知した上で、なおさらに

この問題性の性格は近代小説全体の上に興味深い問題を投げかけているし、またそれ自体それほど見定め易い性格のものでもない。たとえば「舞姫」の挫折とその近代小説としての可能性、近代自然主義文芸との関係、中期作品の一種奇妙なたずまい、これらもそのこととの関連のなかで興味深い。こうして鷗外の歴史への関心は、近代小説あるいはそれを支える近代小説理論一般に対して、興味深い問題の性格をのぞかせている。

ここで問題は再びはじめにもどることになる。石川淳が指摘する「努力」とは、「小説」という表現形式にとって自明のことからなのであり、その限りにおいて、氏の立場は従来の所謂「歴史小説無用説」に帰着することになる。ただ問題は、鷗外自身にとっては、「史伝」は「小説」という原質的な形式を超え出たものであり、「歴史」への関心もそのようなかわりの中で認識され把握されていたという一点である。今この一点は、決して恣意的に理解してはならない。鷗外は、「史伝」について執拗に説明を試みる。

わたくしは筆を行ふに當つて事実を傳ふことを專にし、努て叙事の想像に涉ることを避けた。客觀の上に立脚することを欲して復主觀を縱まゝにすることを欲せなかつた。／

蘭軒傳の世に容れられぬは独り文が長くして人を倦ましめた故ではない。実はその往事を語るが故である。歴史なるが故である。

ここでも先にみた明治二十年代の思考は、その作家的現実の中に深い挫折や悔恨を経験しながらも脈々と息づき続けている。鷗外にとって「歴史」は、彼の原質的な作家意識の中において、単に現代を語る「材料」なのではない。自己と現実とのかわりいっさいを、この「歴史」の中に選びとらんとする。単に歴史の場を借りたのでもない。いわば、歴史探求の行為主体それ自身を媒介手段としながら、人間存在の真実とその実在を顕現しこの現実存在を意味づけんとする。小林秀雄は、次のようにいう。⁽⁶⁾

晩年の鷗外が考証家に墮したという様な説は取るに足らぬ。あの膨大な考証をはじめるに至って、彼は恐らくやつと歴史の魂に推参したのである。

恐らくや、この試みにとって、鷗外自身のいう「客観」「主観」は、その孤独な魂の修辭に過ぎぬ。鷗外は、あわせでまた「現在があまりの儘に書いてよいなら、過去も書いて好い筈だと思つた」とも語つてみせる。ここにいわんとするのは、近代における主観主義の氾濫、そこからおこる現実世界への癒着、そしてなによりもその時代の歴史喪失的傾向なのだ。彼自身、小説が「現在をありの儘に」書かれていく現状にかかりつつ、人間と現実世界のかかわりにおける苦悩や絶望、それらいつさいを表現の中に如何に意味づけるかという、小説の形式の肝心へと関心を向けていくのである。

以下改めて「歴史小説」一般の問題性とその扱い方を検討しつつ、その問題の性格を確めてみたい。

註(1) 石川淳「森鷗外」三笠書房、一四頁。

(2) 石川淳、前掲書、一三頁。

(3) 「山房拊掌談」鷗外全集、第二十二卷、岩波書店。

(4) 「自由新聞の歌人に問ふ」文末に「(明治二十三年十一月)」と記して「月草」に収められている。「鷗外全集」第二十二卷、岩波書店。

(5) 「今の諸家の小説論を讀みて」明治二十二年十一月『柵草紙』第二号に掲載。「鷗外全集」第二十二卷、岩波書店。

(6) 小林秀雄「無常といふ事」「小林秀雄全集」第八卷、新潮社、一八頁。

かつて、いくつかのすぐれた歴史小説論は、「歴史」を単に作品の素材として取り扱わんとした従来の形式論を止揚する試みとして、その問題の所在を提示してみせた。その一つに、有名な高橋義孝氏の歴史小説論がある。それは、はや昭和十二年「澠江抽斎」の価値評価にかかわってもたらされたものである。⁽¹⁾ ちなみにそれは、鷗外の「史伝」についてその「歴史」の意味を考察したおそらく最初のものであったろう。

今その問題のおおよそを確かめるにあたつて、少し記憶にとどめておきたいことがある。この論致が後年いくつかのすぐれた歴史小説論にまとめあげられ、同時に鷗外文芸に対する氏の関心のありようが決定せしめられることとなるのであるが、そこにおいて先に述べた「澠江抽斎」に対する石川淳の評価を仲立ちとして、論理上奇妙な矛盾をおかしていられるという事実である。

氏の論理のおおよそはこうである。氏は、「歴史物語」の形態を「意識と意志とによって媒介される」「精神の規定の実現過程⁽²⁾」とみるヘーゲルの命題を受け継いだベルンハイムの「発展論的歴史観」に自己の立場を築きつつ、「散文」のもつ機能性に徹底して論理的基盤をおいている。つまりその機能性の中に、「歴史記述」と「小説」(「歴史物語」)が同一共同の表現手段として意味づけられる。ここでは、グロルマンの「歴史的真実と芸術的真実」とを同時に承認「せんとする所謂「歴史小説不信論」に対して、氏はこれら二つのものの混乱を、「散文」の機能性の中に徹底して一元的に解消してみせるのである。かくて、「小説とは本来歴史小説なのだ」という、あの名高い氏の命題が成立することになる。そして、かかる命題によって、具体的な作品説明の手続きは次のように説明される。⁽⁴⁾

歴史小説は素材としての「歴史」によってではなく、取り扱い方としての「小説」によって解明されねばならない。

しかしかかる作品解明の方法にとって、先の鷗外の歴史への関心のありよう、そしてまた、それら「歴史」は作品主題の肝心を支えるものとしていかなる意味を持ち得るのかについての考察は、一義的に無用であるかにみえる。この立場は、おそらく「歴史小説」に対する態度決定においては先の石川淳のその極北ではなからうかと思う。史伝「澠江抽斎」を氏の「歴史小説」から除外した所以でもある。

高橋氏は、「小説」が「散文」として獲得しなければならぬ散文性と統一性——それは「歴史」の扱い方として確かめられねばならない小説の一義的な課題となる——について、「澠江抽斎」が多くの難点を持っているとして、「歴史小説」つまり「小説」——「散文」から除外せんとするのである。

しかし氏は後年、その価値評価を逆転してみせる。「澠江抽斎」を「日本文学史上、最初に現われた最も小説らしい小説である⁽⁵⁾」とする。ここには氏自身の論理の限界以上に、「歴史小説」の問題性の困難さやその重層性を思わせる。氏は、「澠江抽斎」を「西欧の芸術精神」——氏の「歴史小説論」はなによりもその西欧の芸術精神に拠っていたはずであるが——に対峙する「日本の芸術様式の原理⁽⁶⁾」として意味づけんと試みる。しかしかかる評価にもかかわらず、その論理的混乱とともに「歴史小説」のよりラディカルな問題性は、すえおかれたままなのである。

註(1) 高橋義孝「鷗外の『澠江抽斎』に就いて」「文学」第五卷第六号。

(2) ①「歴史小説論」「文学」第八卷第十一号 ②「森鷗外」雄山閣などがある。

(3) ヘーゲル「歴史哲学」(序論) 岩波文庫。

ドイツ語の歴史という言葉は、客観的な面と主観的な面との統一として「出来事、事件されたもの」を意味するとともに、「出来事・または事件の記録・なされたものの記録」をも意味する。すなわち歴史は出来事であるとともに、また歴史物語

(歴史の記録)でもある。

(4) 高橋義孝「歴史文学論」「文学」第八卷第十一号、二二頁。

(5) 高橋義孝「森鷗外」雄山閣。一九七頁

注(5)に同、二二頁。

(6) 一方かかる氏の指摘は、鷗外の「歴史小説」「史伝」の近代における意味、しいては鷗外文芸の近代全体に於ける在り様と興味深い問題を投げかけることも確かなのであるが、このことは今は別の論題を形成する。

四

かくして鷗外歴史小説におけるよりラディカルな問題は、改めて「記述された歴史」と「歴史小説」との間には確とした一線を画さねばならないという容易には抜き難い觀念に向きあわされるとともに、この一般的觀念にあつて、「歴史小説」に対する先の鷗外の明確な概念規定とその主張が、近代文芸理論一般の上に逆にきわだつてくることになる。

歴史家ホイジンガーは、「近代の發展概念の地盤に立ちすぎている」として、そのベルンハイムの歴史觀に疑問を提しつつ、次のように述べている。

人類を歴史へとかり立てる精神的努力は、彼らの定義によつて決してとらえられるものではない。ヘロドトスは何を語るのか、彼はなぜそれを語るのかであるか。

従来「歴史記述」に対する形式的觀念論を止揚したかかる指摘は、一人の人間(作家)にとつての歴史への関心のありようというもつかの課題に、より鋭利な問題の所在を示唆するであらう。さらに言い及んで彼は、「精神的努力」

というものが指し示す人間精神の志向に内在する「歴史」と「文芸」の共通的基盤を、次のように説明している。⁽¹⁾

歴史という形式の基盤をなす精神的な努力は、人々が以前のできごとの意味を理解しようとするものである。精神は過去にとりつかれて、緊迫の中におかれる。その精神上の衝動とその産物である歴史との重みと価値は、その特色である完全な厳肅性にある。

今たとえば、「歴史文学」一般について、「歴史文学において取り扱われる史実なるものは、文学作品を形成するテーマの濾過を経たものであることが必要である」という表現論的命題は、どこまでも否定し難いものである。ただ少なくとも鷗外の場合、その「歴史」は「テーマ」の材料として恣意的に選ばれたものではないのである。鷗外自身、その中期文芸世界において彼が自己の中に「時間」を経験し、その精神は「過去」との緊迫の中におかれ、その「時間」と「歴史」が人間存在の意味として開示されていたことが知れる。ということとはつまり、鷗外の歴史小説は、先の表現論的命題に先だって、「過去」「時間」との緊迫関係、いわば「完全な厳肅性」の上に「歴史小説」という形式自体を形成していった点に第一の主要な特色を指摘することができる。しかも鷗外がその形式を「小説ではない」と規定する時、「歴史小説」あるいは「史伝」が小説であるか小説でないかという安易な判断をひかえつつも、そこに扱われる歴大な史実の意味するものが、所謂小説の素材としての役割を超えたものであると考えるほかにように思われる。

鷗外は作品「都甲太兵衛」の中で、「歴史」と「小説」という「二つの床に寝る」苦悩を語り、次のように説明している。

歴史家はこれを見て、わたくしの放肆を責めるだろう。小説家はこれを見て、わたくしの拘執を笑うであろう。

このことばを、鷗外自身の意識の上で過不足なく正当に評価したいと思う。ここにいう「歴史」への関心のありよう

は、「小説家」として素材をいかに取り扱うかという苦悩であるよりも、正当に「歴史」への原質的な関心のありようを意味するものとして理解したいと思う。その一義的な問題性の上に、今「小説」という表現形式自体が一種危機的な様相をおびて向きあわされているのである。逆にいえば、この時近代の文芸理論そのものが危機的な問題性を帯びることになるとも考えられるのである。

本来「歴史」は事実性としての実体を持っているものでなく、私達の価値認識を通じた創造的な構想力によって形成されるものであり、「人間が有限なものとして自分の究極の可能性―死（＝非実存の可能性）―から自己自身へ到来する」⁽⁸⁾時、はじめて「歴史」が人間存在の意味としてあらわになるのであろう。「都甲太兵衛」のなかのことはうかがえる鷗外の歴史への関心とその方法は、正当な意味においてかかる過不足のない「歴史」の意味にみあっていると考えてさしつかえないように思う。換言すれば、この時作家的主題が、危機的な問題性をはらみつ、所謂近代小説という文芸形式を超えたところにまで至り着こうとしているのだといえる。水谷昭夫氏は、「歴史小説」の特性を次のように指摘していられる。⁽⁴⁾

彼らは何よりも先づ「歴史小説」を書くという意識の上にそれぞれの作品を表現形成して行った点に於いて最初に問題となる故である。そこに第一の主要な特性が見出される。

そして少なくとも鷗外の場合、この「歴史小説」を書くという意識が、その近代文芸理論における問題的地平を確と見定めていたことが、なによりも注意されねばならないと思う。つまり、自然主義を中心とする近代小説が「私」の表出やその実感への信頼に作家主体の関心を向けたのとは全く無縁な、現実に対する「私見」や「主観」による判断を避け、その寡黙さと厳肅さの中で苦悩を堪えきった孤独な作家主体のありようとして確かめられるべき性格のものである。

このことの具体的な考察は、それぞれの作品理解を通じてなされねばならないが、今少なくともこのことが、近代的自我の確立とその形式の崩壊に関係があることだけは指摘できる。その意味で、後年の「なかじきり」にみえる一文は興味深い。

／前にアルシャイスムとして排した詩、今の思想を容るゝに足らずとして排したを、何故に猶作り試みるか。他無し、未だ依るべき新なる形式を得ざる故である。是が抒情詩である。

わたくしは叙實の文を作る。新聞紙の爲めに古人の傳記を草するも人の請ふまゝに碑文を作るのも此に属する。

ここに鷗外の歴史小説が向きあっている課題とその性格とは、自然主義を含めた近代小説一般が表現行為の本念とその原質的な意向の深底で向きあわされている課題に、過不足なくみあっていたのである。

ここに今、亀井勝一郎氏の興味深い指摘がある。⁽⁵⁾氏は明治以後の近代文芸に幾つかの「空白」を指摘し、その一つに「理想的人物像の欠如」をあげられる。しかも、それを「現代日本文学の思想的貧困の最大の理由」とみなされている。ここに氏の幾つかのすぐれた鷗外論の視点と関心のありようも指摘できるのであるが、この時、鷗外の歴史小説は、近代小説一般のかかる事態に面と向きあいつつ、作品世界における確とした現実の造型にとつて多くの主義主張やその実感の獲得がいっさい無縁である事情を、作品自体の肝心に見ぬいていたのである。かかるゆるぎない予見に、「歴史小説」を書くという意識とその行為の本念が重なっていくことになる。そしてそれは、亀井氏のいうように「時代の典型として作品の中からあらわれ、人心に深く刻印されるような性格が描かれ」ることによって可能になるのか。そのことについては具体的な作品の考察をまたねばならないが、今少なくとも「時代の典型」とは、現実世界とのかかわりの中における作家的主題の深さと重さ、そしてその表現形式に関係して現成せしめられる。近代文芸理論の一般的傾向の中における鷗外歴史小説の問題性の深さの所以である。

註(1)

ホイジンガー「歴史を描くころ」『ホイジンガー選集』河出書房新社、一二一頁。

(2) 長谷川泉「歴史文学論と歴史小説」『近代日本文学』―鑑賞と研究―所収、明治書院、四二七頁。

(3) エゴン・ファイエタ「ハイディッガーの存在論」理想社、一二七頁。

(4) 水谷昭夫「近代歴史小説の成立と展開」『日本文芸研究』第四卷第二号 三九頁。

(5) 亀井勝一郎「明治における三人の先覚者」『亀井勝一郎全集』第十五卷、講談社、三九四頁。